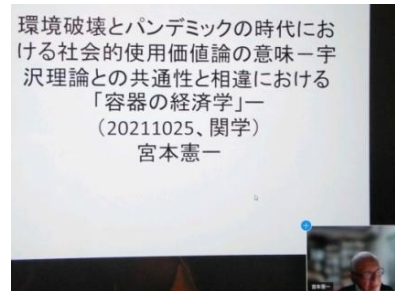


関西学院大学・原田ゼミの「宮本憲一先生講義」を聴く

25 日午後、関西学院大学経済学部原田哲史教授のゼミナールを聴講した。ゼミはオンラインで開催され、「ゲストスピーカー」は宮本憲一先生。早めにズームに入ると、原田教授が私に「40 年ぶりにお会いしました」と。突然のことで、戸惑っていると、幻の名古屋オリンピック誘致騒動の頃のことだと。原田教授は名古屋大学の水田洋先生のゼミであり、その関係で私を知っていたという。何だか嬉しくなり、40 年前のことが思い起こされた。

今回のゼミは写真のように社会的使用価値論がメインテーマである。宮本先生はいつものようにパワーポイントにより、70 分間にわたりパワーのある講義をされた。講義は 1.環境経済学への道—市場経済学を超えて、2.社会的使用価値論への道、という 2 部で構成。ここでは、2 の一部を紹介する。



資本主義社会では物財やサービスは商品として売買されている。商品は個人や社会的組織に有用な使用価値があるので、需要を生み、市場で交換価値をつけて取引される。この使用価値と交換価値(Needs と Demands)の乖離により、社会的に使用価値のないものが大量に作られ、それは廃棄物となり環境破壊の原因となる。人間の生命・生活の維持のためには、市場を経由しない家事・育児・介護労働などがある。これらの労働は社会にとって必須の仕事である。福祉・衛生・防災・清掃・文化のための労働は都市社会ではエッセンシャル、社会的有用労働だが、市場交換価値=賃金が低く、雇用が少ない。人間社会にとって必要で個人にとって有用な Work と、資本にとって必要な Labor との分離といえる。

社会的使用価値の序列・選択・主体を考えるために 2 つの図を示して、共同社会(容器)の政治経済学について社会資本、国家、都市、環境へと研究の歩みを振り返る。つづいて宇沢弘文「社会共通資本論」を評価して、共同社会の政治経済学との違いを指摘する。

そして次のように「維持可能な社会を目指そう」と講義を締めくくる。地球環境の危機は経済学の革新を求めている。同時にこの危機を乗り越えるためには、若い世代の社会活動が世界的に起こらねばならない。国連が掲げている 2030 年目標の SDGs はその主体を企業に置いている。このため資本主義の持続となっても地球環境の持続とならない。資本主義に代わる維持可能な社会は何か。今後の研究と社会活動の目標にしてください。

宮本先生の講義のあと、まず原田ゼミ 3 回生の 3 人が質問した。社会的使用価値の測定など、講義に関連する質問とともに、宮本先生の「戦争直後の体験」についても質問が。私は当時「軍国少年」だったが、広島惨状を列車の中から見て、戦争というものに強い衝撃を受けた。ここに宮本先生の「戦後」、研究者としての生き方の出発点があった。こうしたゼミの場で、先生のあつい思いも聴くことができた。原田ゼミの皆さんに感謝したい。

(2021 年 10 月 27 日)